



第71号  
平成20年(2008)  
4月23日発行  
(年4回発行)

## 根津芦丈翁

青木秀樹

一月の下旬からスギ花粉が飛び、三月に入ると黄砂が降る。こんな時期には外出を控え、閑居しているに限る。そして読書でもしようという気分になる。思い立って東明雅先生の連句の師である根津芦丈先生について改めて読んでみようという気になった。

東明雅編『芦丈翁俳諧聞書』（平成六年刊行）は明雅先生が芦丈先生から伺った話をテープに録って編集したもの。芦丈先生の伊那弁が生々しくそのときの情景が目に浮かぶようである。次に芦丈先生の三回忌追善集として編集された『芋日記』（昭和四十五年刊行）は追善法要・追悼文・芦丈先生小伝・連句作品・俳論俳話が掲載されている。

根津芦丈先生は明治七年（1874）に伊那の地で生誕、昭和四十三年（1968）九十四歳で他界された。呉竹園馬場凌冬宗匠に

師事して連句を習い、二十三歳で凌冬師より伝道の書を受け芦丈と号した。五十歳の時凌冬・那美女と継承された文台を譲られ文台披露を行なう。凌冬師没後は下平可都美・松永蝸堂・賛川他石・茂木秋芳などの各氏に教えを受け、中村竹邨・益田竜雨など全国の俳諧師と風交を重ねた。生涯の作品は三千巻に及ぶという。故天野雨山氏は芦丈先生を天明中興以来の巨匠と目し「薫風俳諧最後の人」と称したそうである。

芦丈先生と明雅先生の出会いは昭和三十六年九月、芦丈先生八十七歳、明雅先生四十六歳の時である。その後四十二年四月まで信州大学連句会で毎月連句指導が行なわれた。

『芋日記』に掲載されている連句俳誌『山襖』は芦丈先生が九十歳を過ぎて創刊されたもの。連載された「甘汁・苦汁」は歯切れのよい俳論で、『俳諧聞書』の伊那弁のかけらもない。話し言葉と書き言葉の違いが大きいことに驚かされる。

連句の付けについて聞かれて「二章体の俳句の付けと同じである。二章体の俳句は殆ど小さい連句であると思えばよろしい。（中略）要するに歌仙なら三十六句、三十六歩で一歩も後へ戻らぬ。二花三月と云って、花が二度、月が三度の定座がある。外は同じもの、同じ言葉を再び云わぬと、心得て居ればよろしい。数限りなくある制約の書など見る必要はない。渋滞なく転じて行けばよい」と答えたこ

と（「山襖」1号）、などは初心の心得としてわかりやすい。

芭蕉の心法の一環として、選、捌、校合について書いてみるとして「選は一句を見る時、第一に新しみがあるかどうか、無ければ捨てる。（中略）俳句の選は之でよろしい。」「捌きは連句の捌きであって、選の様な簡単なものではない。前句を十分に理解し頭において附句を見る。一句立はもとより附肌、附味、打越に戻るか戻らぬか、自他の移り変りから転じ工合、なお起句から全部見て折合、指合の有無迄十分に見極めて治定する。」「校合は一卷出来上がったものを検討する。この時も制約、心法に照らして違っている所を逐一加除する。かくして完全な巻にする。」「（山襖）9号）

以上のことは私たちが明雅先生に習ったことと同じであり、芦丈先生の教えが今日に伝わっていることになる。連句の師系というのはこういうことだと納得させられる。

芭蕉は制約（式目）を作らなかつたといわれるが、「古式を破りたまふ事もあり。されど私に破らるることは稀なり」と『去来抄』にある。私たちは熟達に至るまでは一定のルールに則って付けと転じを考えて一巻を巻き上げるのが無難であり、上達の近道ではなからうか。明雅先生が整理された「猫養会式目」はそのためのノウハウであると理解してほしい。

# 正花覚書

## 東明雅

連句における花の句は、多くの場合春季で桜の花を詠むことになっているが、その場合必ず「花」という語を用いなければならず、「桜」と言ったのでは、賞翫の意がないと言ふ理由から「正花」にはならない。逆に言えば「桜」という語の代わりに「花」と言う語を使った句ならば、大かた正花になり得るのである。しかし、たとえば「花のかんばせ」・「花の唇」などは「正花」であるが、これらは桜のイメージより、賞翫の意が強く、または「中華」・「花軍」なども正花として認められて来たが、これらはもともと中国渡来の語であり、桜とは殆んど縁のない語である。

また、同じ「花」の字を使っても、「作り花」・「絵の花」・「花鏝」・「花嫁」・「花婿」などは、春の正花にされず、「雑の正花」であるし、「波の花」・「火花」・「糞の花」などは「似せものの花」とされて正花とは認められない。

だから、新しい語を使って花の句を作られる場合は、従来猫養で用いられた正花・非正花のリスト（この文章の後半参照）を参考に

されたらよいと思う。たとえば、「花前線」

・「花泥棒」などは「桜前線」・「桜泥棒」の意であるから問題ない正花としても、「花電車」・「花札」・「花四天」はいかがであろうか。

「花電車」は「花車」・「花見車」に似ているが、必ずしも桜の頃、あるいは桜見物の為の電車ではないから、「雑の正花」であろうし、「花札」も「花むすび」・「花靱」の類として、「雑の正花」に加えてもよいだろう。「花四天」

は華やかなものであるが、演劇関係の語で、直接桜とは関係ないから、「花子の狂言」と同じく、「雑の正花」であろう。近頃「木花開耶姫」を花の句に用いるのが流行しているが、これは、「木花」が桜の雅称であるから、「春の正花」としての資格は十分であろう。

○春の正花 花を待つ・初花・花の蕾・花の咲く・花盛・花を降らす・落花・飛花・花散る・花便り・花の宿・花の席・花の隣・花庭・花の庭・花の山・花のもと・花の窓・花の戸・花の扉・花の都・花洛・中華・花畠・花園・花の幕・花の波・花の滝・花の雲・花の雪・花の錦・花ふぶき・花の雨・養花天・花冷・花の香・花の匂ひ・花ひら・花ふさ・花明り・花を宿・花を主・花を友・花宴・花軍・花見酒・花の隨身・花守・花売・花作・花見・花人・花疲れ・花簪・花の枝・花の葉

○雑の正花 作り花・絵の花・花むすび・花靱・花形・花塗・花子の狂言・花鏝・灯の花・花毛氈・花嫁・花婿・詞の花・花やき・声花・花やか・花道・花舗・雪月花・花紅葉・花実・花言葉

○似せものの花（非正花） 波の花・雪の花・火花・糞の花・花野・六の花・花の富貴・花の隠逸・花の兄・花の君子・睡れる花・花かつみ・四ひらの花・風花

○その他の非正花 桜という語が正花として使われないのであるから、その他、梅・桃・藤・菊など、すべての四季の花も、それを梅・藤などと呼んだ場合は正花にはなり得ない。

「ねこみの」第二十六号より転載

平成二十年一月二十日

於ホテルフロラシオン青山

「純白のけふ」

坂本孝子 捌

純白のけふを誇るや寒牡丹 孝子

蝶散りまがふひとひらの雪 藍

ピンセットポトルシップを組立てて 明子

泣き止みし嬰は居間の主役に 政志

ウ 名月を浮かべて掬ぶ井戸の水 佐紀子

髪梳いてゐる竜田姫なり 明

鳩を吹く音も優しく待つ男 佐

ぎゅっと抱かれてそれが運命 藍

夢に見し大連立はうたかたに 志

飛ぶUFOのもしやミサイル 藍

ソクラテス・レーニン酒の肴とし 明

叔父の従弟の義理の姉です 藍

尺八の秘曲に花は散りかねて 志

チヨモランマにもうらかな風 明

ナオ 汗血馬少年春を迫り越せり 佐

張込み刑事足裏に胼胝 明

町営の温泉鍵を借りて入る 佐

土産に渡す赤いセーター 志

身勝手な記憶喪失問ひ詰めて 藍

とどのつまりは金婚の父母 明

焼き魚豆腐を卓の定番に 佐

朔太郎忌の無才目墮落 藍

ツーリング泊りとまりの夏の月 明

鬼神のふるふ里の和太鼓 佐

ナウ 汎地球虚構市場の増殖し 藍

パソコン打てば邪魔をする猫 志

御目見得の袂も匂ふ花の宵 孝

無住の寺に田螺鳴く頃 志

連衆 矢崎 藍 野口明子 峯田政志

間佐紀子

「佛は」

梅田利子 捌

佛は昔日のまま賀状来る 利子

太格子より匂ふ輪飾 冬乃

キャンパスに海の真青を描くらん 和代

バッグにいつもマイタオル入れ 鐵男

ウ 大菩薩峠涼しき月の光 英子

髪のままですする夏蕎麦 代

惹かれるの悪い噂のある男 男

部活でいつも世話を焼き過ぎ 乃

残り香のあれやこれやと思索して 男

政治と宗教話題タブーに 英

この年のえらく肘張る冬將軍 同

地球に優しき自転車を漕ぐ 乃

道祖神軽く拝みて花の昼 代

病癒えたる父のうららか 乃

ナオ 揚雲雀戦の跡も知らぬ気に 同

案内板は六ヶ国語で 男

江戸歌舞伎持つてはるばる勘三郎 代

升到熱爛たつぷりと注ぎ 英

泊りなさい今宵の雪は積もります 男

もつれし紐のはらり解けて 乃

持参金胸算用をちよいと越え 英

秋物にする猫の洋服 代

真夜の月サックス響く公園に 乃

木の実時雨が相槌を打つ 男

ナウ 社長さん身奇麗なままご引退 英

眼を輝かせ夢を語る子 代

一片を畳にこぼす花衣 利

魚拓に写す乗込みの鯛 代

連衆 百武冬乃 長崎和代 林 鐵男

佐古英子

「去年今年」

橋 文字 捌

言魂の力待みて去年今年 文字  
 懐紙さらりと書初の筆 尚子  
 広野原遊ぶ幼ら賑やかに 郁子  
 丘に反芻きりもなき牛 美恵  
 月代に厨の窓を開け放ち 實  
 西鶴忌なり集まれる友 郁  
 やや寒と帰りは肩を触れてくる 恵  
 ガラスの靴はちよつと窮屈 同  
 異国とて届かぬ恋のなほ深し 郁  
 割箸使ひ鬩魚突つつく 恵  
 厚焼の卵ふつくら焼き上り 尚  
 母の母より貰ふお目玉 同  
 打ち連れて賀茂の御社花万朶 郁  
 瀬音に混る松蟬の声 實  
 ナオ観覧車耕しの人遠く見て 同  
 パン屑で消す下手なデッサン 恵  
 サキソフォン技の巧みに満ち足れる 郁  
 南部訛のきつい若者 尚  
 株安値世界経済震撼す 同  
 おさがり重ね無駄の無い服 郁  
 暖房は三度低めで故郷の酒 恵

嘸めば嘸むほど味の出る彼

同

短夜の抱擁妬む月独り

尚

青大将の消ゆる叢

實

ナウドドラマ観て涙ぐむこと多くなる

同

北京五輪をアスリート待つ

郁

花片々生々流転定め無き

恵

陽炎震へ遙かなる夢

執筆

ウ

實

連衆 宮川尚子 東 郁子 山口美恵

梅田 實

「七度の干支」

倉本路子 捌

七度の干支の眉引く初鏡 路子  
 切山椒の香り漂ふ ふみ  
 合宿のメンバーうしろ歩きして 碧  
 大学ラグビーTV中継 ジョウ  
 鯉幟尾が撫でてゐる昼の月 み  
 髪洗ふ女生垣の奥 碧  
 優男くぐり戸押して忍びより ウ  
 留守番電話リンリンと鳴る み  
 注文の古書は本日送ります 碧  
 北京五輪へ消える胡同<sup>フイストン</sup> 同

いざ出航給油再開自衛艦

ウ

算盤を手に願ひましては

み

花片は蝶ともつるる風の中

ウ

上野の山の鐘かすむ頃

路

ナオ涅槃会に集ふ善男善女達

碧

立ち止まる犬ぐつと引き寄せ

み

北斎も叩き売られた御一新

碧

国開かれて枯れる名の草

み

雪の湖ウインドサーフィン滑り行く

ウ

私好みのくどい顔立ち

み

毒呷り恋の成就の木乃伊いづ

ウ

弓ひきしほりねらふ満月

み

秋深むいづくよりの尺八の音

碧

一直線に藪抜ける鴟

ウ

ナウ親離れ子離れ誓ひ酌み交はす

碧

歳月数へ春を惜しめり

み

田安門出れば外濠花の坂

路

雲なき空を泳ぐ武者風

碧

連衆 中村ふみ 松本 碧 林ジョウ

「猫の養」

鈴木美奈子 捌

猫の養借り着せんとや嫁が君 美奈子  
 俵百石見よおらが春 豊美  
 置なはる峰のパノラマ指さして 遊民  
 点呼きびきびボーイスカウト 達子  
 ナ 納涼の映画を覗く青き月 弘子  
 その香水は僕誘ふため 弘  
 省エネとひとつしーツに包まりて 遊  
 希望ヶ丘に風車林立 豊  
 特種を足で稼ぐは特派員 弘  
 明日発つ友に餞別の嵩 民  
 町々の犬になつかれ巴里暮し 達  
 マヌカンの部屋帽子置かるる 民  
 千の風ふうつと吹いて花筏 同  
 蝌蚪の仔数多未来夢みる 弘  
 ナ オオ着任の校長の髭うららかに 達  
 餡をこねるに蒨蓄のあり 豊  
 シヤッターに落書多き商店街 弘  
 株価下がりがりて寒き生活 民  
 酢豆腐を湯豆腐にする若旦那 豊  
 つつころばしは床がお上手 達  
 遊女なら間夫がゐなけりや聞ばかり 民

波柿たわわ実る僧院

月中天知命の酒をひとり酌む

ホーミーイー流るパオのうそ寒

ナウ蒼き狼万里の道を往還す

立見席からちよつと合図を

偲ぶるは山ふところの花の精

ペーフメントにあたたかき雨

連衆 高橋豊美 内田遊民 篠原達子

松原弘子

「歌がるた」

式田恭子 捌

歌がるたひと声で取る母の技 恭子  
 春着の袂ひるがへる席 庸子  
 一輪車ぐるぐる回り路地裏に 淳子  
 豆腐屋さんのけふも来る頃 和彦  
 ナウ 猫岩の現れて引き潮月涼し 庸  
 踊り串打つ初漁の鮎 淳  
 蠱惑的美脚すらりととのぞかせて 同  
 フェルマータにて実りなき恋 欣二  
 同窓会もはや野球は無理となり 彦  
 托鉢僧の修業きびしく 庸

バラグライターとび越えたきはナイヤガラ 彦

霞の中の大統領選 庸

創業者挨拶つづく花筵 淳

アリバリーにて頼む草餅 庸

ナオ告天子ひねもすうたひうたひをり 淳

訪ね歩くは一葉の井戸 庸

植木屋が教へてくれる年の暮 彦

腸に沁む貰ふ熱爛 淳

紅つけた文を開けばうれしくて 二

魔女に習へる媚薬製法 淳

侏儒だまし忍び入りたる姫の閨 同

水面いろどる紅葉ゆらりと 彦

竈の窓有明月の残りある 二

こほろぎ飼ひてリタイヤの日々 庸

ナウ 顔見知り犬を褒め合ふ公園に 淳

地価が上がった故郷の町 恭

五分咲きの花の便りを追ひ求め 彦

あれこれ続く夢の軟東風 二

連衆 久保田庸子 上月淳子 吉行和彦

諏訪欣二

「左衽の漢」

近藤守男 捌

鷹を舞ふ左衽の漢初酋  
 豊かな額に淑気みなぎる  
 バイオリン支へるチエロの響きあて  
 地下鉄口に便利よきビル  
 二段づつ階を上りて月涼し  
 汗の背中に誰か貼り紙  
 こいつなら乗つてもよいとウインクを  
 ぴしゃりと締める天の岩戸よ  
 大陸に火花を散らす商社員  
 油の壺にアブラカダブラ  
 青空に鳶ゆうゆうと輪を描き  
 暖の先に獅子庵をみる  
 数多なる軍書に哀し山桜  
 ひらひらひらと双蝶々  
 ナオ遠足のバスはいつしか合唱団  
 回し飲みする水筒の酒  
 札束が二重に見える乱視なり  
 公私を問はず寒波襲来  
 着ぶくれはもう限界よお父さん  
 女医の通勤赤いジーパン  
 恋すれば声はいつしかビブラート

守男

良子

ゆみを

志世子

有子

良

を

良

を

良

有

志

を

良

を

有

良

有

同

志

を

有

愛染明王棚に爽やか

みすずかる信濃の秘湯月泛かべ

猿の親子も交へ地芝居

ナウ自分史のために読み出す古手帳

健康ジュースコンフリー入り

鐘撞けば峽に花散る尼僧院

夢銘々に放つ風船

連衆 本屋良子 青島ゆみを

秋山志世子 佐々木有子

「キヤッチボール」

生田目常義 捌

キヤッチボール声朗らかに初み空

東天紅の御慶ながなが

九十九折四輪駆動はしらせて

茶葉のブレンド凝って魔法瓶に

パロツクの通奏低音速音なる

月高々と打ち水の路地

すまし顔足をくづして夏料理

細身好みか太め好みに

優男金を借りればそれつきり

お蚕ぐるみの娘どうなる

「偽」といふ黴菌マンの歩く国

陋巷ひとと侘びて棲むのみ

かたはらに赤児ねむらせ花見船

春の夕べの占ひは吉

ナオ弥生山百号キャンパス収めたり

ひとつふたあつ鳩に餌やる

いろいろの禁止貼り札池の柵

デニムのズボン氷柱さがって

寒舁われに降り来よ婚話

賭け碁で取りしやごとなき姫

禅問答弱輩者は理解せず

旅寝の夢にひびく邯鄲

没り日あり月の出ありて地球なる

分水嶺行く爽涼の象

ナウおやはてな漬物石が眠りこむ

書齋に飾る白尉の面

語らひの花の明かりはいつまでも

抱ち瓶廻す土匂ふ宵

連衆 松原 昭 染谷佳之子

山田美代子 杉山壽子

壽

義

之

壽

代

昭

壽

同

之

代

之

昭

代

壽

之

義

之

代

「みやあらくもん」

鈴木千恵子 捌

※ みやあらくもんその名ゆかしき年酒かな 千恵子

ごまめとちよろぎ重箱の隅 秀樹

縄跳びの幼なの声に誘はれて 央子

買ったばかりの靴でジョギング 幸子

ウ 小唄振り帯のきりりと月涼し 明子

くどかれ上手しぶく噴水 央

失踪の姫をかくまふ出来心 樹

白馬の剣士皆美形なり 幸

ドア叩く借金取りがけふもまた 樹

濟州島の湯につかりたい 明

信仰のうすく霊山めぐりをり 央

庄屋の祖先蘇我の一族 樹

池の面を覆ひ尽せる花筏 幸

お玉じゃくしに足の出る頃 樹

ナオ 永き日のなすこともなき午後三時 央

珈琲通は砂糖ミルクを 明

ペンギンと過ごす南極越冬隊 千

息白く吐き孤高貫く 央

駅伝の襷は重く半世紀 樹

真心よりも筋肉が好き 明

抱かれてすっぱり入る安らかさ 央

狗尾草を払ひかねたる 幸

大統領選挙激戦ゆがむ月 樹

知らんふりして裏のすいっちょ 同

ナウ 稲架の田と休耕田の農夫居て 央

こだはり多く少し変人 幸

幻の迎陵類伽と花の中 千

春の汽笛に夢の覚めたる 明

※みやあらくもん＝富山方言。「身が楽な者」の意。

連衆 青木秀樹 遠藤央子 飯島幸子

森 明子

「仏蘭西の塩」

中林あや 捌

仏蘭西の塩かるく振る小豆粥 あや

嫁が君らしちらり風窓 雅子

口笛は飾り音符も忠実に アンズ

帽子をぬいでお散歩もいい 一枝

ウ 短夜の川面の月のまたゆらぎ 初子

夏館には不意の客人 雅

たちまちに頬もこころもくれなゐに 初

何故か通じるタガログ語さへ 雅

それぞれが十字を切つて主の持り ア

古紙の足らない製紙業界 や

ぎゆう詰めのパッキン材も贈りもの 枝

ドイツニールランドで地震訓練 ア

機窓より眺める首都は花の海 枝

春の夕べは絵手紙を描き 雅

ナオ ぞら仔猫貫禄もしや虎かとも や

次期大統領選ぶ投票 枝

おもむろにマンホールの蓋持ち上げる ア

徳利並べ呷る熱燗 雅

股引の烏賊のごとくに干されをり 枝

のっぺらぼうね君が囁く や

年上の女目当ての恋の罨 枝

妙見堂に紅葉かつ散る ア

雁の棹雲井の月へ影映し 雅

まづは爽やか単線の旅 初

ナウ 自立する独り住まひの母ありて ア

雪解氷を受ける掌 枝

花しづか夢占ひもときの間に や

路地いっばいにしやぼんだま湧く 初

連衆 武井雅子 松島アンズ 西田一枝

田中初子

「骨正月」

鈴木了齋 捌

骨正月終ひは白くなる予報 了齋  
 ゆるり出で発つ山の初駅 久美子  
 入学子ラップのリズム踏みゆきて 未悠  
 ケータイグッツきらきらとする 泉子  
 待ち合はす角の広場に夏の霜 要子  
 彼を刺した蚊刺して私も 久  
 勝負服筆筒の中をいっばいに 同  
 女房元気で留守がいいとは 要  
 ウイルスにとっては怖い温暖化 久  
 糞が足りない猿の惑星 齋  
 先生が走らなくても師走なり 泉  
 データ盗まれ役所あわてる 悠  
 ファイナルはスターマインの大花火 久  
 夜店の金魚いつまでも飼ふ 悠  
 ナオ挑戦す世界一周船の旅 要  
 ダンス陶芸趣味は多彩に 久  
 ともかくもそろばん勘定ちらつかせ 要  
 神だのみする大店のほん 泉  
 紫に濡れる時雨の鳩の首 齋  
 ヴェルレーヌ追ふ木枯の巴里 泉  
 タッキーを抓む仕草の愛らしく 久

妬けば妬くほどはまる術中 同  
 求めないことを山羊髭諭す月 悠  
 薨がじっくり醸す葡萄酒 要  
 ナウ見るべきは見終へた人の西鶴忌 泉  
 当り狂言打ち止めにする 要  
 夕映に散りゆく花は夢のごと 齋  
 磯菜摘みゆく能登の海岸 悠  
 連衆 副島久美子 棚町未悠 青木泉子  
 山本要子

連句とジャズのグループ感

伊藤良重

たいそうな見出しで書き出してしまった。  
 私はジャズのことを詳しくは知らない。また、  
 連句についても読者諸兄姉には、恥ずかしい  
 ほどの知識しかない。それでも私は「連句の  
 グループ感」の虜になって、拙い句を作り続  
 けている。  
 と、書いてきて「グループ」と「グループ」  
 の違いがわからない、と言う方もおられるこ  
 とだろう。「グループ」と言うのは、本義は  
 溝、狭義ではレコードの溝から発するなんと  
 もいえない悦楽のことである。レコードから

CDの時代になって、改めて見直された音楽  
 の心地よさ、とても言おうか。とにかく、言  
 葉にできないヨロコビが、連句においても存  
 在すると言う意味での「連句のグループ感」  
 である。  
 初めて参加した連句は、矢崎藍先生考案の  
 「連句ROCK」だった。6句しかないので  
 「ROCK」。遊び心あふれるネーミングだと  
 思う。たった6句の中に、月または花を詠み  
 発句から挙句までに季語を入れ、一度使った  
 言葉は、二度使えない。その制約がいっそう  
 作句の意欲をふるいたたせる。  
 ああ、これは一種のセッションだな、とそ  
 の時思った。一句一句は個人の作品だが、巻  
 き上がったものは協同の作品となる。一人ひ  
 とりが個性的であれば、それだけで面白いか  
 と言うと、何気ないやり句が前句・後句を引  
 き立たせる。それらの文芸が、私の知らない  
 ところで連綿と続けられていたと言うのも、  
 発見の一つだった。  
 今、ころも連句会の会員として座の連句を  
 巻く傍ら、インターネット連句「KUSAR  
 I」にも顔を出す。ネット上での常連が、実  
 は大学の先生だったり（あるいはもつと名の  
 あるお方かも知れない）、遠い雪国の人であつ  
 たり、おのおのの個性と背景を活かしつつ、  
 紡ぎ出す連句のグループ感に今日も身をゆだ  
 ねている。



## 連句と小説

吉行和彦

明雅先生曰く

「小説の構成は連句と似ているんですよ。」  
随分と以前に昼食をこ一緒したときにお聞きしました。

「小説も発句、脇、第三、等々と分けられます。」

小説を連句の構成で書くことが出来るもの  
お考えには大変に新鮮さを感じて今でも鮮明  
よみがえります。

川端康成の『雪国』で検証してみます。

発句〈国境の長いトンネルを抜けると雪国で

あった

脇 〈夜の底が白くなった〉

第三〈信号所に汽車が止まった〉

発句は〈トンネルを抜けると、そこは雪国  
だった〉とやや変形して親しまれています。

脇も決して甘くはなく、発句で真昼の銀世  
界を想像させておいて、実は夜。

第三は、三十分後に駅を降り、本題の葛藤  
が始まる前振りです。

そして表から裏へと続いていきます。人目  
や人の噂を気にしない反面、自分に枠組みを  
はめる温泉芸者駒子、決断が苦手そうな元中

年二トの島村、思い込んだら命がけの純粹  
(単純?)な葉子、三人の葛藤があばれどこ  
ろです。

挙句〈天の河が島村のなかへ流れ落ちるよう  
であった〉

火事の後、川端康成特有の静かな寂しさが  
漂う挙句で終わります。

某小説家曰く

「小説では場面展開が重要だが、最も重要  
なのは数頁の見せ場である。前後の場面は見  
せ場を見せ場たらしめるためのプロログで  
あり、エピログである。だからだとした長  
編はいくらでもあるが、全編が面白い小説な  
ど存在しない。読者も山場を期待して読み進  
み、頂上を楽しむ。後は余韻を味わいながら  
静かに下山していく。」

連句も後で読み返して、これは面白いなど  
感じる句があつてはじめて句の流れを楽しめ  
るような気がします。

さてお仕舞いは、青木会長の今年の年賀状  
からの引用。

《楽しくなければ連句じゃないという思いが  
年々強くなりました》

## 四人掛け考

中林あや

二〇〇八年二月十四日付けの東京新聞に、  
「満員電車をなくす方法」という記事があり、  
小田急新宿駅での通勤時の混雑風景の写真が  
添えられている。

こういう記事を読むと、この高齢化時代、  
人々はみな私同様座りたいものらしい。きつ  
とかなりの確率で腰を痛めているのかも。

やむをえず秦野に転居して五年、相変わらず  
新宿方面へ出沒せねばならない。そして、  
私の座りたい欲求はいよいよ強い。秦野発八  
時五十七分急行新宿行は先頭や最後尾の車両  
にはまだぼつぼつと空きがある。

電車一両には、前と後に四人掛けの座席が  
優先席を含め四つ計十六人分、その他ドアを  
挟んで七人掛けの座席が六つ計四十二人分、  
一車両に五十八人が座れることになる。

わたくしの場合椅子の色が違う優先席より、  
普通の四人掛けを選ぶ羽目になぜかなる。

昨日もそうだった。後ろから二両めの電車  
はざっと見た所、四十五人分位の座席が既に  
占有され、後部の四人掛けには向い合った座  
席の両端に男女が座っている。八人分の席の

四人分に乗客がいる理屈である。どの席に  
るか選んでいいる余裕はない。一番手近な空間  
になだれこむように座る。かなり浅ましいが、  
新宿までの一時間十五分、発句も作る、ちく  
ま親書「ヤクザと日本」も読まねばならぬ、  
そして大半は眠る。

しまったと思った。私の左側の寝ている男  
がごちんと堅い。私と一緒になだれこんだお  
ばさんがぷくんとでかい。おばさんの隣の少  
女だけが普通サイズである。要するにL、L、  
L、L、L、Mと並び、その全部がこの冬一  
番の寒さに備えて完全防備のむくむくである。  
本厚木でMサイズが降りる。その跡地に身長  
百八十、靴は三十糎ほど体重は知らないが、  
頑丈まちがいなしの学生風が割り込んだ。こ  
の四人掛けの座席ほどの程度のがたいの人間  
用なのだろうか、慢性疲労症プラス冬型衣料  
の塊は、どんなに窮屈でも絶対立たないとい  
う固い意志を維持しつつ、神奈川県から東京へ  
と移動していく。

ペンを取り出す余裕も空間もない車内で浮  
んだ発句のようなものは一句  
valentine 最後の恋を今年また あや

## COME BACK TO ACC

生田目常義

この一年間、朝日カルチャーセンター連句  
入門講座に通った。ここを卒業してから二年  
余の歳月を経ている。いずれ自分の連句ライ  
フはリセットが必要、とは思っていたが、も  
つと間隔を置いてのこと、とも思っていた。  
教室も7階に変わり、受講の人々もだいたい変  
った。変らないのは教室の雰囲気。67号に佐  
々木有子さんがお書きのとおりで、和気藹藹  
はかつて僕が入講したときと同じである。  
ほっとして席に着き講座が始まる。講義も  
あらためて聞くと発見がいろいろ。以前には  
気付かなかったこと、忘れたこと。「他の会  
釈」などちゃんと教わっていたとは、ね。  
そして付け句の時間。初めての人々の句の  
発想の新鮮さ、選句の意外性。いつの間にか  
自分の連句発想も凝り固まっていたのだなあ  
ほんとうに再受講してよかった。  
快適な頭脳のリフレッシュとして、ぜひぜ  
ひ、皆様にもお勧め申し上げます。  
自己都合により一年で退学だが、また機会  
を得て3ヶ月でも6ヶ月でも通ってみよう。  
そのときは必ずお目にかかりましょう。

## コペルニクスは殺をした

永田吉文

昨年末の十二月二十五日に、第二歌集「夏  
男」(雁書館刊)を出した。第一歌集「樹の  
人」(ながらみ書房刊)を出してから五年が  
たっている。第二歌集は第一歌集より纏める  
のが難しいと人は言うが、自分は短期間です  
んなり編むことが出来た。

二十代で詩をつくっていた私は、詩の延長  
として、三十歳前後から俳句や短歌をつくり  
始めた。しばらくすると、詩・俳句・短歌の  
三つを同時に作るのは、無器用な自分には無  
理だと悟った。ではどれか一つにするとして、  
どれにするかという事になり、自分には一番  
難しく感じられ、よく分からないと思える短  
歌を選んだ。天の邪鬼ゆえであろう。爾来、  
二十三年になる。下手の横好きか。

現代の詩として短歌を選んでから十年ぐら  
いしてからか、短歌と詩はちよつと違うので  
はないか、と思うようになった。そしてその  
思いはどんどん深まっていった。二〇〇二年  
に出した第一歌集の「あとがき」で、次のよ  
うに記した。「短歌には詩ではない(短歌)  
としか呼べないものがある、と思う(中略)  
それは、五七五七七の調べによってつくられ

る何か。△詩▽という範疇を越えた、△短歌▽としか呼べない短歌もある、と思う」と。

その時は、第一歌集であったので、歌壇に波風を立てることは出来るだけ避けたい、無事に船出したいと思い、それ以上の事は書かなかつた。自分自身の考え（短歌観）も未だ纏まり切れていないようにも思え、それ以上言葉に出すことを止めた。案の定、歌壇では無視され、それはそれで有り難かつた。無事に船出が出来た。しかし、第二歌集では躊躇うことなく、自分の短歌観を出し切ろうと決めた。書き始めると今まで考えて来た断片的思いが、自然に無理なく纏まった。それを後記に掲載したので、要旨を記す。

結論はシンプルである。△歌はしらべであり、それに尽きる。△これだけである。歌が五音七音五音七音七音の調べであるのは誰でも認める事であり、常識であり、何の問題もない。しかし、「それに尽きる」と言い切つたものは、千数百年の短歌の歴史で誰かいたであろうか。簡単にはそう言い切れぬ大きな壁がある。歌は定型詩である、という世間の根強い常識である。しかし、実作者としての私の実感は「詩である短歌もあるが、詩でない短歌もある。詩ではないが、短歌でしか表現できない短歌もある。それ故に短歌であるか

ないかを決めるものは、五七五七七のしらべ、

つまり定型以外にはない。五七五七七のしらべがある事が短歌である事の最低限の条件である」と言うものである。興味のある方は、歌集『夏男』を読んでいただければと思う。六百十六首の歌もあわせて楽しんでいただければ幸いである。後記に記した△実感としての「しらべ」△は、淡々と二日間で書き上げたものだ。内容の重さを感じつつも、驚きも感動もなかった。ただ書き終えたという安堵感だけがあつた。しかし、現代社会、現代歌壇のどれだけの人に受け入れられるか、という思いは無論ある。天動説が常識だった時、地動説を考えついたコペルニクスは、発表を躊躇つた。そして選んだ道は、死後、友人に発表してもらう事だった。生前発表していたら、異端審問にかけられ、火炙りの刑にでもなっていただろうか。狡いとも思うが、うまいことを考えたものだとも思う。

横山大観展を観た。この巨人は一体生涯にどれだけの山をつくつたのかと驚愕した。それに比べ、自分はどれだけの仕事を成すことが出来るのか。自分にも第二歌集で一つの山を作り上げた、という自負はある。そしてまた、いつの日か大作をという気概も。しかし今、連句修業を通し、自分の小ささを思い知

る日々である。

連句と出会って二年余り、句作りに色々困難があつた。五七五七七作りを日常としていた歌人にとって、長句の五七五にしる短句の七七にしる、別の表現形式と思える。五七五七七を無理矢理五七五に縮めることは出来ない。逆は有り得ても。しかし、雑の七七句は作り易かつた。五七五に七七を付けるのは、歌作りの日常に近かつた。もつとも、短句七七に五七五の長句を付けるのは、逆さに歌を作るようで不思議な違和感があつた。幸い、今はもうなくなつた。又、短歌と俳諧の最も大きな違いは、季語を入れる句がある事だ。これも初めは戸惑つたが、ようやく慣れて来た。それらの苦勞が楽しみともなつていく。

連句は短歌と同様に私の生涯に渡る楽しみとなるだろう。時がくれば、歌人達へ連句を広める旅をしたいとも思う。個人主義的な現代歌人には、共同作業・協調主義の和の文芸である連句の体験はなくてはならないものになると思う。私が苦勞した分、後から続く者には、いいアドバイスが出来ると思う。天高く道果てしなく遠し。いざ。

## 事務局便り

### ◇猫養同人会

日 平成二十年六月十五日(日曜日)  
時 十一時より十七時(受付十時より)  
場所 新宿ワシントンホテル

新宿区西新宿三二一九

電話03-3343-3111

総会終了後 歌仙興行

### ◇猫養会総会

日 平成二十年七月十六日(水曜日)  
時 十一時より十七時(受付十時半より)  
場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一六三

電話03-3631-1448

総会終了後 歌仙興行

### ◇次年度の正式俳諧のお稽古は

平成二十年九月十七日(水)

江東区芭蕉記念館で行います。

### ◇猫養基金にご協力有難うございました。

天の川連句会様 六千円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

### ◇新入会員紹介

川口あや 東京都杉並区在住

### ◇住所変更

中田あかり 東京都目黒区

中村ふみ 東京都品川区

川端洋 福岡県福津市

武井雅子 千葉県柏市

森 明子 東京都新宿区

田中ます美 北名古屋市(表示のみ)

### ◇退会(猫養会・猫養同人会)

八代 嫺

佐藤良彌

和田順子

葛とく子

難波さえ子(同人会のみ)

### ◇「猫養作品集」第十八号が完成致しました。

一冊 二千円

左記へお申し込み下さい。

〒202-0012

西東京市東町4-4-28

鈴木千恵子

☎・FAX 0424-2317817

### ◇猫養会名簿

平成二十年年度の猫養会会員名簿を作成中  
です。

住所変更・訂正が必要な方は、五月末日ま

でに事務局にご連絡下さい。

事務局 式田恭子

☎・FAX 03-3498-0029

### ◇会費納入のお願い

猫養会の平成二十年年度年会費納入をお願い  
致します。

四月と七月の例会時に受付で申し受けます。  
例会に出席できない方は左記口座にお振り  
込み下さい。

猫養会 みずほ銀行新宿新都心支店

普通 3376088

### ◇訂正とお詫び

前号に文字の誤りがありました。ここにお  
詫びして訂正致します。

五頁 下段二行・四行

高橋豊実↓高橋豊美

八頁 中段十九行 風信雲暑↓風信雲書

八頁 下段二行 仁王経寺↓仁王経等

十二頁 上段四行 Yaloo→Yahoo

季刊 『猫養通信』第七十一号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二二二一十六

編集人 猫養通信編集部